施薬寺の本堂は境内のやや奥手の階段を上がった小高い場所にあります。堂内には本尊の薬師如来立像が安置され、脇侍として日光菩薩像と月光菩薩像があり、これらに十二神将像が加わります。薬師如来には日光・月光の両菩薩と十二神将がセットになる場合が多く、施薬寺の薬師如来像はその典型例と言えます。

この施薬寺の薬師如来像は一木造で、厳しい表情・やや肩をいからせた姿勢などに平安時代前期の作風がみられますが、衣文表現や彩色などには後世の特徴がみられるとも指摘されており、総合的に判断すると、室町時代に制作された仏像と推定されています。

薬師如来はその名のとおり「無明の病を直す法薬を与える医薬の仏」ですが、奈良・平安時代には「敵に立ち向かう力強い仏」としても信仰を集めたとされています。「戦いの仏」としての薬師如来は「大江山の鬼退治伝説」中で登場する七仏薬師に関係しています。

この伝説の概要は、当地で悪行をして、民を悩ませていた英胡・迦楼夜叉・土熊など三鬼らを麻呂子親王（用明天皇の皇子で聖徳太子の異母弟）が討伐する物語です。話の中で、麻呂子親王は戦勝祈願のために七体の薬師如来像を彫ったとされ、そのうちの一体が施薬寺の薬師如来立像と伝えられています。

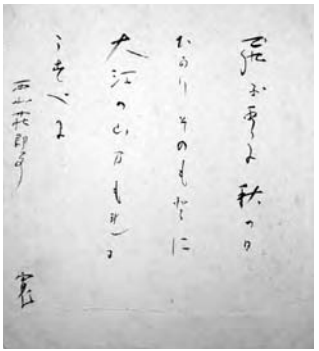
（与謝野町教育委員会）



木造薬師如来立像

- ●指定区分
  与謝野町指定文化財（彫刻）
- ●制作年代
  室町時代
- ●規模
  像高39.8cm
- ●指定日
  昭和57年６月10日

与謝野町ゆかりの歌人、与謝野鉄幹（寛）がかつて書き残した、左のような色紙が町内に残っています。



飛ぶ雲に秋の日ひかりそのもとに
大江の山のもれるうすべに　寛

【歌意】真夏に比べ低くなった陽光が空の雲に当たって光り輝いている。その空のもとには大江山連峰が広がり、山肌一面がこれまた紅葉によって薄紅色に輝いている。

昭和六年十一月にこの地を訪れた鉄幹が大江山の紅葉をうたったものです。

色紙には「西山荘即事」の添書きがあります。西山荘とは、加悦の俳人・夏川庵鉄山こと杉本治助が自邸内に設けた隠居所のことで、鉄幹がこの場所で作った歌であるとわかります。

この歌はのちに「飛ぶ雲に秋の日あたりそのもとに大江の山の盛れるうす紅」と改められ、当時鉄幹が刊行していた雑誌『冬柏』などに掲載されました。

このとき鉄幹は、父・与謝野礼厳の生前の功績を讃える地元有志がこの年に建立した「礼厳法師追念碑」の除幕式に出席するため、温江の地を訪れました。

左の写真は除幕式当日のもので、中央左側の洋装の人物が鉄幹です。現在も残るこの追念碑を、鉄幹は先に紹介した大江山の短歌と共に、次のように詠みました。



岩に彫り我父の名を光らしむ
情けあるかな与謝の里人　寛

鉄幹が丹後の人々に寄せる感謝の念が、歌から伝わってくるようです。

（与謝野町教育委員会）



三河内地区のほぼ中央に位置する倭文神社は、織物を始めた祖神とされる天羽槌雄神を祭る旧府社です。

神社の創立は明らかではありませんが、当初は三河内の笊村に鎮座し、貞応二年（一二二三）鎌倉時代前半に現在の地に遷座したと伝えられています。江戸時代には石崎大明神と称していましたが、明治になって倭文神社と改められました。

本殿は、東西に長い境内の西奥にあり、前に幣殿・拝殿を控えています。建物様式は入母屋造、銅板葺きの一間社で、正面に唐破風を付け、縁が回っています。組物により軒の装飾を賑やかにし、向拝に天井を設けるなど、江戸時代を通じて丹後地方の神社本殿にみられる特色を表しています。

本殿の建立年代は、社蔵の「歴代記」の文政四年（一八二一）の条に「是　三河内石崎大明神再興有之候」とあることから、江戸時代中期の文政四年（一八二一）に再建されたことが分かります。

例年、五月四日には三河内曳山祭が行われ、京都府登録文化財の曳山行事が執り行われています。例祭当日は、各町内の山屋台が倭文神社前に集結し、本殿前では神楽が奉納されます。

（与謝野町教育委員会）

倭文神社本殿

●場所
与謝野町字三河内小字中坪
●指定等
【本殿】京都府登録有形文化財（建造物）
平成8年3月15日登録
【境内】京都府文化財環境保全地区
平成9年3月14日決定

旧加悦鉄道加悦駅舎は、現在の与謝野町加悦庁舎の向かいにあり、赤と緑の屋根瓦と白い壁に彩られた木造建物です。

大正十四年、地元住民の強い要望で、縮緬産業の発達と地域交通網の整備を目指して加悦鉄道株式会社が設立され、翌年には丹後山田駅（現野田川駅）～加悦駅間五・七kmの鉄道路線が開業しました。そして、鉄道の開通に先駆けて、大正十五年八月には加悦駅舎が完成しました。

駅舎は二階建ての木造建築で、二階部分が寄棟造、一階が切妻造りで桟瓦を葺き、下見板張りの壁に縦長の窓が特徴的な建物で、その洋風の外観は当時の加悦の町中では異彩を放っていました。



鉄道の開業に伴い、加悦駅前の道路も拡張整備され、駅舎周辺は新たな町の中心として発展しました。しかし、近年、自動車輸送が貨物や交通の中心となり、加悦鉄道の鉄道事業が昭和六十年に廃止されると、駅舎は現在の地に曳屋移転されました。その後、加悦駅の構内は、加悦町役場庁舎（現在の与謝野町加悦庁舎）に建て替えられました。

現在、鉄道線路敷跡はサイクリングロードとして整備され、町民の通勤・通学や散策道として利用され、駅舎は当時の貴重な鉄道関連資料を展示する文化遺産として保存されています。また、与謝野町の観光案内所として利用されるなど、与謝野町の観光事業の拠点としても活用されています。

（与謝野町教育委員会）

旧加悦鉄道加悦駅舎

●種別
有形文化財（建造物）
●指定
与謝野町指定文化財
●指定日
平成８年５月１日
●所有
与謝野町

与謝小学校北の交差点から西へ府道七〇一号線を進むと、滝川を境に山が迫ってきます。そこからおおよそ四百㍍ほど進んだ右側に施薬寺があります。

府道に面した参道口の階段を上がった境内の右手には、持仏殿があります。一見、本堂かと思うのですが、本堂は境内を抜けてさらに階段を上がったところにあります。今回紹介する木造愛染明王坐像は、持仏殿に安置されている仏像です。

愛染明王は、恋愛・縁結び・家庭円満などの仏とされており、その姿は一面六臂（顔一つ・腕六つ）で、他の明王と同様に忿怒相（厳しい顔）をしています。頭には苦難に打ち勝つ強さを表現する獅子の冠をかぶり、結跏趺坐で座るスタイルが特徴です。本寺のものもこの特徴を備えています。

また、本寺の愛染明王坐像の特徴として、胎内仏が挙げられます。これは、仏像の胎内に納められた小仏像で、旧加悦町域では、本寺を含めて以下の四ヵ寺六例が知られており、与謝野町全体ではさらに増加すると推察されます。

●施薬寺／愛染明王坐像
●宝勝寺／文殊菩薩坐像
●常栖寺／釈迦如来坐像・文殊菩薩像・普賢菩薩像
●慈雲寺／千手観音立像

丹後・北丹波地域は胎内仏の多い地域という指摘があります。その理由として、平安時代以降の七仏薬師の伝承仏像にも胎内仏がみられることから、その伝統が長期間にわたり当地域で継承されてきたと推察されています。

（与謝野町教育委員会）

愛染明王坐像



●指定区分
町指定有形文化財〈彫刻〉
●指定日
昭和57年6月10日
●制作年代
さや仏：室町時代（右）
胎内仏：鎌倉時代末期（左）
●規模
さや仏：像高47.5cm
胎内仏：像高19.7cm

大内峠一字観公園内の妙見堂の傍らに、与謝野町ゆかりの歌人、与謝野鉄幹（寛）・晶子夫妻の歌碑が残っています。

本のしおりを模した石碑の一方の面に鉄幹の歌が、他方に晶子の歌が刻まれています。鉄幹・晶子の歌が並んだ歌碑は全国に存在しますが、両面に刻まれている例はまれです。

昭和五年五月に丹後を訪れた鉄幹・晶子夫妻。二人はここ大内峠で多くの歌を詠みました。また、前日には岩滝小学校で講演も行っています。この講演会を主催した岩滝町婦人会が創立十周年を記念して設置したのがこの歌碑です。側面には昭和五年五月二十一日の建立と記されています。

たのしみは大内峠にきはまりぬ
まろき入江とひとすぢの松　寛

【歌意】
橋立の見方、楽しみ方はさまざまであるが、極めつけはなんといっても大内峠からの眺望であろう。丸く孤を描く阿蘇海の入江の中にただ一筋、松の緑に彩られた橋立が真一文字に走る様は、簡素であるがゆえに、足す物も省く物も無い美しさがある。



天橋立を横一文字に望む大内峠一字観公園に建てられた鉄幹・晶子夫妻の歌碑（左端）

海山の青きが中に螺鈿おく
峠の裾の岩瀧の町　晶子

【歌意】
空の青さに海も山も溶け込み、景色が青一色となる薄暮れどき、裾野を見下ろせば岩滝の町並みがあたかも螺鈿細工のようにきらきらと輝いて、海山の青と美しい対照をなしている。

二人がこの町の美しさに感嘆した様子が、今日の眺望と碑に刻まれた文字、そして歌から伝わってくるようです。

（与謝野町教育委員会）

与謝野町ゆかりの歌人、与謝野晶子は夫鉄幹とともに昭和五年五月に丹後を訪れ、大内峠で多くの歌を詠みました。

皐月風与謝の入江をわたる日に
大内峠の新道を行く　晶子

【歌意】
五月の清々しい風が阿蘇海の入江に吹き渡る一日、大内峠に新しくできた道を通る私のそばを新しい季節の訪れを感じさせる風が吹き抜けてゆく。

この歌は、親交のあった地元の俳人で郷土史家の小室洗心による案内で自動車に乗った晶子が大内峠への車中で詠んだものです。

歌の中の「新道」とは現在の府道大宮岩滝線にあたります。かつて明治から大正期にかけて整備されたこの道は、昭和二年の丹後震災で大きく崩落してしまいました。この道路を復旧する際に、当時普及しはじめていた自動車が通行できるよう拡張整備して、昭和四年十一月に完成しました。

竣工時の写真が当時の様子を伝えています。現在の様子と大きく異なり、斜面の地肌がむき出しになっていることで、うねる道筋がすっきりと見通せます。

晶子がこの道を通ったのが写真を撮影した半年後ですので、おおよそ変わらない風景を車窓から見たことでしょう。新しい道を駆け抜ける清々しさを歌にしたのもうなずけます。

この歌を書いた晶子直筆の掛軸が江山文庫に所蔵されています。六月から開催の江山文庫企画展で公開の予定です。

（与謝野町教育委員会）



府道大宮岩滝線（当時の名称は岩滝峰山道路）復旧工事の竣工記念写真（昭和四年十一月撮影）

時の贈り物［第38回 宮津騒動と南京大鉢］

江戸時代の文政5年（1822）、宮津藩の財政難が原因で、重圧な課税が領内の農民に強いられるようになり、その生活を大いに苦しめました。そしてついに、同年8月13日に起こった石川村（当時）の農民の蜂起が発端となり、民衆の暴動が起こりました。

この時、宮津藩財政の重役を担っていた領内の庄屋宅はことごとく打ち壊され、岩滝の大千賀（おおせんが）こと、千賀八郎助（せんがはちろうすけ）の家宅も打ち壊しに遭いました。大千賀の家宝として受け継がれてきたこの大皿もその時に粉々に割られたと伝えられますが、修復して後世に大事に残されてきました。明治時代以降は他の人に受け継がれ、現在は与謝野町が所有し保管しています。



「南京大鉢」と名づけられたこの器は、口径57㌢と大きく、底も平らなことから観賞用の大皿に分類されます。

打ち壊しの際に割れた破片を金泥（きんでい）で丁寧につなぎ合わせ、欠損している部分を補っており、器に対する愛情が感じられます。器には中国風の庭園と山水花鳥図が描かれており、ツバキや梅の花などが赤や紺、金襴手（きんらんで）を基調に丁寧に描き出された逸品で、その様式から18世紀前半に佐賀県で作られた古伊万里の大皿と考えられます。この頃の伊万里焼は世界的なブランド品として重宝され、中国やヨーロッパに数多く輸出されています。

この大皿は割れたことで工芸品としての美しさを失いかけてはいますが、歴史資料としての価値を今に留めながら、残された輝きを今に放っています。

（与謝野町教育委員会）

南京大鉢
●種別
与謝野町指定有形文化財（工芸品）
●指定日
昭和42年7月1日
●寸法
口径57㎝／高さ9㎝

時の贈り物［第39回 明境神社の菩提樹］

まちの文化財

春の加悦谷祭で子どもや青年らの勇壮な太刀振りが奉納される下山田地区の明境神社。境内には、この地方では珍しい菩提樹が樹生しています。

菩提樹は、仏教の開祖、釈迦がこの樹木の下で悟りを開いたと伝えられていることから、神聖な樹木として寺院の境内に植樹されることが多いようです。

ハートの形をした葉をつけ、夏に葉の付け根に細長い葉状の苞を出します。そして、その中央から花弁を出し先端が分岐して花を咲かせます。花は黄褐色の五弁花で芳香があり、球形の実を結びます。

樹高は約15㍍、人の肩ぐらいの高さの幹周りは1・6㍍あります。町内では他に類を見ない樹種であり、古い部類に属する天然記念物と言うことで、平成13年2月に町の指定文化財に指定されています。

梅雨が明けると、菩提樹がハート形の葉の付け根から苞を出し、花弁に花を咲かせます。一度その珍しい花をご覧になってみてはいかがでしょうか。

（与謝野町教育委員会）



明境神社の菩提樹

- ●場所／明境神社境内（字下山田）
- ●指定等／与謝野町指定文化財（天然記念物）
- ●管理者／明境神社
- ●樹齢等／約150年

時の贈り物［第40回 定山遺跡出土の染色道具］

定山遺跡は、石田の集落域にあたる遺跡です。今までに数回発掘調査が行われ、縄文時代から鎌倉時代の品々が発見されています。

今回紹介する染色道具は、昭和53年度の圃場整備（田んぼの区画整備）事業に伴う発掘調査で出土しました。木板の中央に幾何学模様が彫刻されたもので、平安時代（約900～1200年前）のものと推定されています。出土場所は、現在の石田公園の北側に広がる田んぼです。

発掘調査当時、この木板はあまり注目されていませんでしたが、昭和61年に保存処理を専門機関に依頼した際、染色道具である可能性が指摘されました。染織研究者の見解は「技法的には『板締め染色用』の可能性が高い」というものでした。

板締め染色された布は奈良時代の聖武天皇の遺品を伝える正倉院にあるそうですが、板締め染色の実態は明らかではなく、現存する染色用版木としては、法隆寺や東寺に絵を彫刻した鎌倉時代から室町時代の版木が伝わっている程度で、平安時代の版木は極めて貴重なものということです。

定山遺跡からは、版木以外にも漆塗りの烏帽子も出土しており、これらは普通の村からは出土しないので、この地は「特殊な機能を持った場所」ということになりそうです。古代の役所に関係する地域であった可能性が考えられています。

丹後ちりめんの一大産地の与謝野町で、かくも貴重な染色道具が出土した必然を感じずにはいられません。

定山遺跡などの出土品は、長らく京都府立丹後郷土資料館（宮津市）で保管されていましたが、このたび、与謝野町へ引き取り、現在、本品は古墳公園はにわ資料館で展示中です。

（与謝野町教育委員会）

染色用版木の全体
（長辺 74.5cm、短辺 17cm、厚さ 2.2cm、版面幅 33.6cm）

